

難治性中耳炎に対する鼓室胞切開手術の1例

淡路基幹家畜診療所 三原診療所

○山本直史 橋本幸昌 住 伸栄 長谷川弘哉 小山憲司 宮崎俊輔 野口 等

近年、牛のマイコプラズマ性中耳炎に対する外科処置法として鼓膜切開法、加圧耳内洗浄法、灌流洗浄法の有効性が報告されている。しかし、臨床ステージの進んだ症例に対しては鼓室胞内の貯留物を回収することが困難となり、効果が得られず、死産転帰となることが多い。今回、従来法によって効果がなかった難治性中耳炎1症例において、小動物臨床で実施されている鼓室胞切開手術を応用したところ、臨床症状の改善を認めたので報告する。

材料および方法 症例牛は2012年2月24日生まれの子牛。初診は2012年5月20日（86日齢）で、右片側性耳翼下垂、眼瞼麻痺、斜頸そして咀嚼困難へと進行した。抗生物質、副腎皮質ステロイド等による内科的治療に加え、加圧耳内洗浄法および灌流洗浄法の併用により加療するも効果なく、衰弱進行。2012年7月2日（129日齢）、以下の術式で鼓室胞切開手術を実施した。

①2%キシラジンにて鎮静し保定。下顎辺縁～耳根部～頸部にかけて剃毛・消毒し、塩酸プロカインにて局所麻酔。外耳孔と外眼角を結ぶ直線と角から下ろした垂線との交点から腹側に約7cm皮膚切開。この切開部の中心から尾側方向にT字になるように約7cm皮膚切開。同様に顔面皮筋も切開。②軟部組織を剥離すると目視できる耳下腺および耳下腺リンパ節の間を血管を避けながら鈍性分離し、鼓室胞を確認。③創外固定用ステップピン（ネジ付キルシュナー、直径3.4mm、全長150mm）を電動ドリルにて穴を拡張するように2～3回刺入し、開口部を拡大。④鼓室胞内の貯留物を掻き出し、加温した抗生物質添加生理食塩水により十分洗浄。⑤ドレーンチューブを装着し、軟部組織、筋層、皮下組織および皮膚を縫合。⑥術後7日目にドレーンチューブを抜去。14日目に抜糸。

結果 術後2日目に食欲および眼瞼反射の発現、3日目には右耳翼の挙上と自力可動を認めた。7日目には軽度の斜頸が残るものの、眼瞼腫脹消失、活力および食欲も正常となった。畜主の意向により自家肥育し、2014年12月18日に一般出荷。枝肉重量319.8kg、格付等級A4-6、枝肉単価3310円であった。

考察 鼓室胞切開手術により鼓室胞内圧が下がり、耳介眼瞼神経等の圧迫が解除された結果、臨床症状が改善したと考えた。本法によりマイコプラズマ感染症が治癒するわけではないが、早期の臨床症状の改善により、再発しない、もしくは再発しても治療に反応できる程度の患畜の体力回復が期待できる。症例牛は、枝肉重量としてはやや劣るが、最終出荷まで肥育可能であった。本法は、顔面神経に近接した部位が術野となり、後遺症のリスクもあるため、畜主に対するインフォームドコンセントを必要とするが、難治性中耳炎治療法の選択肢の1つとして十分な有効性があると考ええる。